

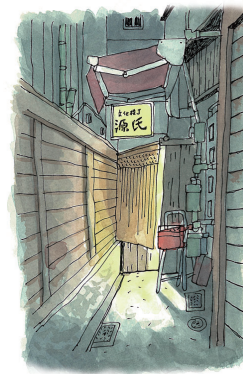
杜の都・仙台は「横丁率」も高い

——仙台・文化横丁

自然の緑地や農地、公園、河川などが地域に占める割合を示す「緑被率」という言葉があります。その緑被率で全国の大都市中トップクラスにあるのが仙台市。ちなみに東京23区は20%、大阪市は7%ほどですが、仙台市はなんと約79%と群を抜いています。駅周辺こそ高層ビルが数多く立ち並んでいます。戦災復興の区画整理で中心部は整然としたまちなみを形成し、仙台城跡のある青葉山公園をはじめ、定禅寺通や青葉通の並木の美しさは印象的です。

そんなまちに猥雑で懐かしい風情の横丁など、もはやなかりうと考えるのは早計でありまして、例えば「稲荷小路」「虎屋横丁」「名掛丁センター街」など、戦前戦後から続く横丁が何筋も生き残っています。

「文化横丁」もその一つ。二本の路地をつないで新旧の飲み屋が軒を連ね、灯ともし頃には、勤め帰りのサラリーマンで大賑わい。お隣には「壺式参横丁」もあり、こちらは八百屋や肉屋も入り交じり、食品スーパー誕生以前の昭和30年代そのまま。杜の都は、緑だけでなく横丁の多彩さも全国トップクラスです。



雰囲気の良い居酒屋「源氏」は、文化横丁からさらに極細の路地へ



大人に目覚めるまち、蕨

埼玉・蕨駅周辺

住めば都。長年住むまちには誰しも愛着を覚えるものです。ならば、埼玉県南部にあるわがまち蕨の魅力は何か？ 坂がなく、地勢はあくまで平坦。面積約5km²、人口約7万人、日本一のミニ市ながら人口密度日本一。市町村を五十音順に並べれば最後にくるまち。ついでに、「鶴舞う形の群馬県」「犬の形の神奈川県」など、お国自慢カルタにならえば、わがまちは「パンツ形」。形だけでも愛着を覚えますが、そんな蕨の魅力を独断で三つ挙げましょう。

その一、「浦和なんか目じゃなかった」

江戸時代、街道筋にあった蕨は、慶長17年（1612）に江戸から二番目の宿場町となりました。中心部は南北十町（約1km）、荒川の川止め中に大名行列が重なっても賄えるように、大名の泊まる本陣が2つ、脇本陣も1つあり、中山道六十七宿中でも有数の賑わいある宿場町でした。今でこそ埼玉県下で中心的存在の浦和ですが、蕨宿に比べればお隣にあった浦和宿は実にこじんまりしたものでした。

ちなみに市立歴史民俗資料館には、旅籠や商家、本陣の一部が復元されており、幕末から昭和20年代に隆盛をきわめた綿織物業の紹介などもあります。

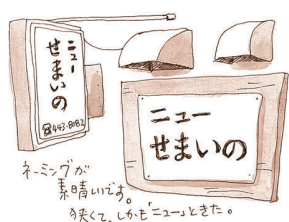
その二、「成人式の元祖はウチですけど、何か」

終戦直後の混乱と虚脱感が大きかった昭和21年11月、当時の蕨町（現・蕨市）青年団が、20歳を迎えた成人たちを招き、「これから英知と力を結集し、祖国再建の先駆者として自覚をもって行動すべき時」と励まし、前途を祝しました。その意義が評価され、1948年公布・施行の祝日法により、翌年から1月15日は成人の日に。以降はこの日に行われるようになったとか。つまり成人式発祥の地は蕨なのです。蕨市では現在でも成人式ではなく、あくまで「成年式」。「成年式発祥の地」記念碑も蕨城址公園にあります。

その三、「昭和の残り香漂うまち」

蕨駅西口に、2010年竣工の30階建てタワーマンション「シティタワー蕨」と、文化ホール「くるる」、保育園などが併設された再開発地区があります。そこからすぐの所にあるのが、再開発地区とはうってかわって怪しげな「蕨名店街共同ビル」。できたのは1964年、前回の東京五輪の年です。年季の入った2棟のビルは一階部分が吹き抜け通路で、狹隘な空間に小体な飲食店が軒を連ね、昭和のオジサンを誘ってやまない匂いがプンプン。

宿場のまち、成人式発祥のまち、オジサンを誘うまちと、歴史と懐の深さを感じるまち。それが蕨です。（白川洋）



蕨名店街共同ビルに入るお店

